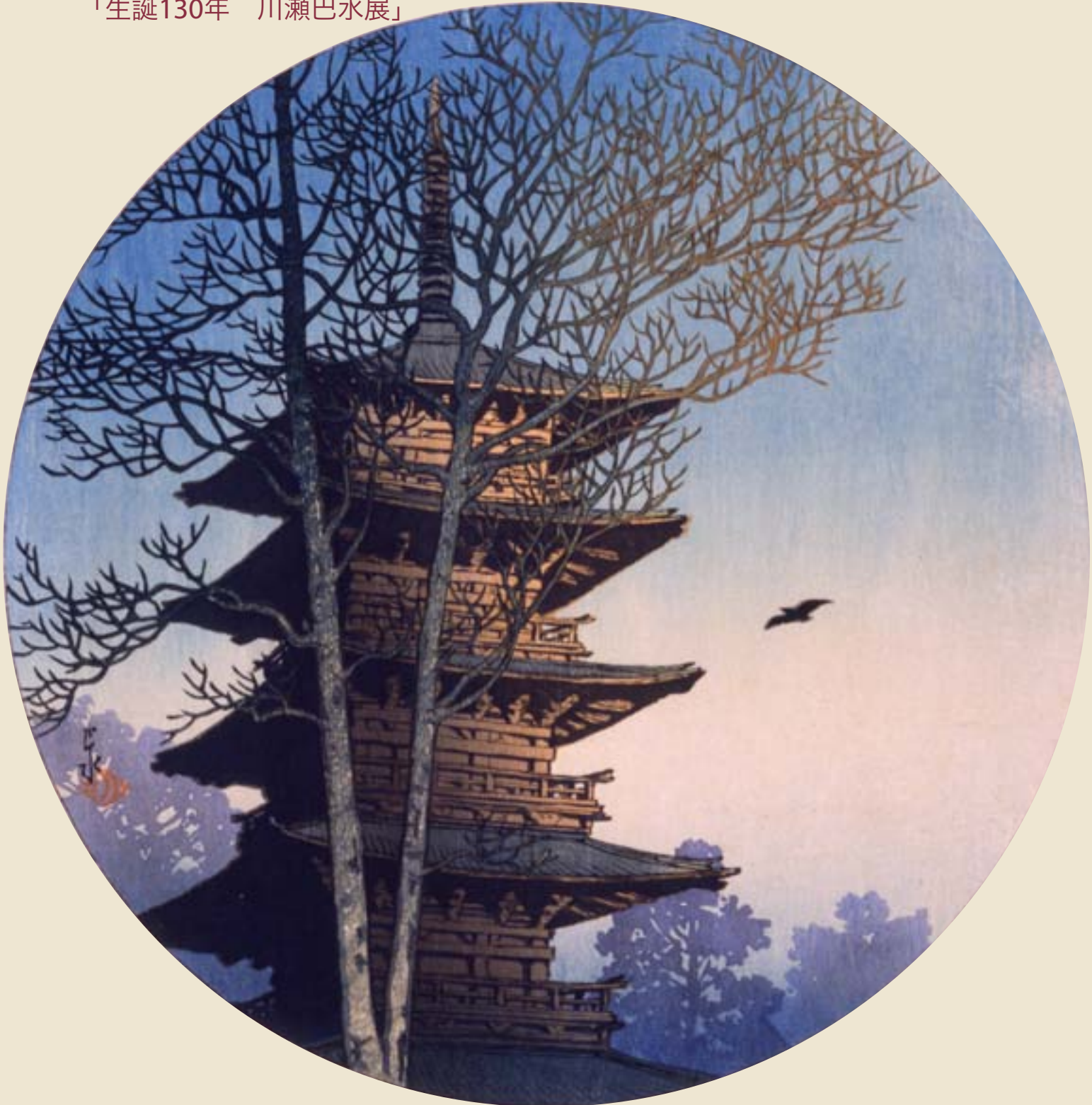


Topics

「ジョルジュ・ルオー展」
所蔵作品展「現代美術と祈り」
「生誕130年 川瀬巴水展」



館長のつれづれだより ～ルオー展によせて～



千葉市美術館では、この秋のメインに位置づける特別展として「ジョルジュ・ルオー展」を開催します。ジョルジュ・ルオー(1871-1958)は、ヨーロッパにおける20世紀最大の宗教画家とも呼ばれています。早くから日本では、良く知られ、関心も高く、日本人の好きな近代ヨーロッパ画家の一人といえます。

日本人で初めてルオーの作品を購入したのは、画家の梅原龍三郎とされ、また武者小路実篤や志賀直哉など、白樺派の作家がこの画家に傾倒し、評論家の小林秀雄もルオーの画を所蔵していたといえます。パリでルオーの収集を本格的に行った日本人は、福島繁太郎で、16点ものルオーを所有していたという記録があります。わたしの大学での恩師は、その福島旧蔵のルオーの一枚を自宅の書斎に掛けておられました。

日本国内には、現在なお、ルオーの母国フランスに劣らない、質の高い優れたコレクションが幾つもあります。実業家の出光佐三は、ルオー生誕100周年記念展のために日本に持ち込まれた54点の作品を見て、大きな感動を覚え、その全てを購入する決意をしました。これをきっかけに、出光の創設した出光美術館は、本格的な収集を継続的に行うことで、400点におよぶ世界的に評価される高質なルオーコレクションを構築しました。

わたしは小学生のときに、初めてルオーの絵画に触れる機会がありました。昭和26年か27年ころのことかと思います。戦後まもなく東京で大規模なルオー展が開催されていますから、おそらく両親に連れられて見に行ったのでしょう。黒っぽい画面に点じられる黄色や赤や青や緑などの色彩に、鮮烈な印象を受けた覚えがあります。わたしにとってもルオーは忘れ難い画家と言えます。昭和26年12月号の『芸術新潮』には、福島繁太郎の夫人・慶子がルオーとの親交の思い出を綴っています。いまそれを読み返してみ、改めてルオーの人となり確かめ、その魅力を感じることが出来ました。

先年出光美術館の理事の一人としてわたしは、パリのピナコテーク(絵画館)で開催された出光美術館所蔵のルオー展に行きました。その折に、ルオーのアトリエも訪問しました。リヨン駅に近い街中にそのアトリエはあり、仕事場の窓からは駅舎に建つ時計塔が望まれ、ルオーの眺めていた風景を追体験することが出来た幸いを感じました。画家は、絵筆の運びを休め、しばし安らぎを求め、あるいは街の賑わいやそこに生きる人々の、さまざまな人間模様といったものを観察していたのでしょうか。

本展は、出光美術館をはじめとする、国内に存在するルオー作品の主要なご所蔵者、機関の方々のご協力により実現しました。すなわちこの特別展は、それらから選りすぐった名品が一堂に揃うまとない機会であり、担当学芸員の言葉を借りれば「油彩・水彩による絵画作品および版画作品の中で、類型化され繰り返し描かれた人物表現に注目し、ルオーの同時代社会への観察者として

のまなざしと人間存在への深い洞察を手がかりとして、この画家が今なお私たちに訴え続けるメッセージを探り、その魅力に迫ろう」とするものであります。日本人に愛好され、現在も高い関心が寄せられるルオー絵画の優品を、存分に味わい、お楽しみ頂ければ有難く存じます。

同時開催は、当館の所蔵品から「祈り」と関わりのある三人の現代作家の作品から選び、三作家ならではの静謐な世界を紹介します。特定な宗教を超えた、現代的な「祈り」と「崇高」の表現を体験して頂ければと思います。

「ルオー展」に引き続き11月26日から2014年1月19日までは「川瀬巴水」展、1月25日から3月2日までは、「江戸の面影」展と続きます。

川瀬巴水(1883-1957)は、大正から戦後にかけて活躍した版画作家で、日本各地の風景を600点におよぶ木版画に刻んだ作家です。旅の印象を情緒たっぷりに描くその作風から、「昭和の広重」とも称えられています。欧米でも非常に高い評価が与えられています。

その次は「江戸の面影」展です。浮世絵、美人画、風俗画と一口に言っても、その場面、画面には一体どんな人物が登場しており、またその人物たちがどのように表現されているのでしょうか。そういうことに注意し、画面、場面の内容を検討、分析することで、そこに描かれている、人、場所、もの、時などの、何であるかを明らかにします。美人画、風俗画の面白さ、見ることの楽しさ、この特別展をそうした浮世絵再発見の場として戴くことを期待しています。どうぞ展覧会をご高覧のうえ、千葉市美術館を引き続き、ご支援下さいますようお願い申し上げます。

[館長 河合正朝]



パリにて、ルオーのアトリエ

ジョルジュ・ルオー展

GEORGES ROUAULT

「ジョルジュ・ルオー展」では、ルオーの絵画や版画における人物表現に注目し、この画家独自の人間洞察の特質を探ります。本論では、ルオー展をご覧いただくうえで知っておくと良い知識を交えながら、展覧会の見所をご紹介します。

■日本に深く根ざした画家ルオー

ジョルジュ・ルオー(1871-1958)は、日本ととても関わりが深い画家です。本国フランスを除けば、現在最もルオーを愛好し、最も多くのルオー展が開かれている場所が日本であるといっても過言ではないでしょう。その影には、彼と日本の美術家、コレクター、文人たちとの間でかわされた親密な交流があったのです。

最初にルオーの作品を購入した日本人は、梅原龍三郎と言われています。1908年、パリのサロン・ドートヌで彼の作品を目にした梅原は、当時まだ無名に近かったこの画家に強く惹かれました。1920年に再び渡仏したとき、後述するヴォラールの画廊で彼と出会った梅原は、ついにその作品を1点購入するに至ります。この日本に持ち込まれた梅原所蔵の油彩を見たことがひとつのきっかけとなって、収集家の福島繁太郎は、パリでルオーの収集を本格的に始めます。1930年代初頭には16点ものルオー作品を所有していただけでなく、1929年から日本に戻る1933年まで、この画家と家族ぐるみで交流しました。(図1)盲腸炎を患った夫人の療養のためスイスのモンタナ＝シュル＝シエールに移り住んでいたとき、ルオーがそこに数ヶ月間滞在し、福島家の1階で作品制作に励んだこともありました。この他にも、武者小路実篤や志賀直哉ら白樺派のメンバーがこの画家に傾倒し、巖光、松本竣介、三岸好太郎、鳥海青児ら若い画家達もその影響が垣間見えるフォーヴィスム調の絵を描くなど、ルオーはすでに戦前から日本に深く受容されていたのです。



《優しい女》1939年 油彩、紙 出光美術館蔵

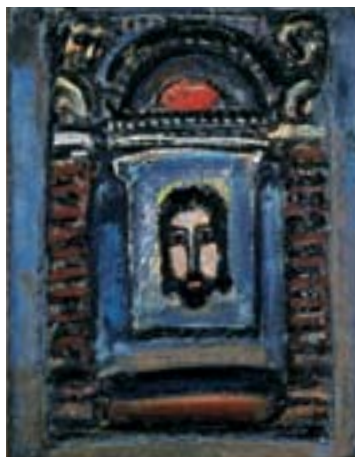
戦後になっても、ルオーの大規模な展覧会が日本で開かれ、出版物も次々と刊行され、その人気は一層の高まりを見せます。そのような状況のなか、生誕100周年記念展(1971年)のために日本に輸入された連作油彩画《受難》(図2)54点を、出光佐三が購入したことがきっかけとなって、出光美術館はルオーの作品を本格的に収集していきます。現在その数は約400点を数え、極めて質の高いコレクションとして世界的に高く評価されています。本展は、この出光コレクションを中心に、国内では出光と双璧を言われるパナソニック汐留ミュージアムのルオー・コレクション、長年日本におけるルオー紹介に重要な役割を果たして来た吉井画廊(清春白樺美術館)、画家の代表的な版画作品を多数所蔵する富山県立近代美術館をはじめとする所蔵者のご協力により実現しました。国内にこれほど質の高いコレクションが多数存在する例は、西欧近代の巨匠のなかではルオー以外あまり見られません。本展は、それらから選りすぐった名品が一堂に揃うまたとない機会となります。

■画商ヴォラールと版画集『ミセレーレ』『ユビュおやじの再生』

アンブロワーズ・ヴォラール(1866-1939)は、ルオーをはじめ、セザンヌ、ルノワールなども扱ったモダン・アート期を代表する画商のひとりです。画商というと単に絵を売るだけの存在と思われがちですが、ときにはプロデューサー的な役割も果たし、画家の制作に大きな影響を及ぼすこともありました。1917年、4年前から交渉を続けていたルオーとの専属契約がまとまり、ヴォラールは彼のアトリエにあった絵画770点を買いました。以後ルオーとヴォラールは、時として反目しながらも、後者の死の年まで20年の長きにわたって、二人三脚で歩み続けていきます。それまで妻マルト(アンリ・ル・シダネルの妹)がピアノ教師をするなどして支えていたルオーの生活も、契約をきっかけに安定します。この直後から水彩やグワッシュ作品の数が大幅に減り、制作活動の中心が油彩に移るとともに、暗くグロテスクだった人物像も、徐々に色彩豊かで穏やかな傾向を見せ始めます。



(図1)《葉子》1948-52年 油彩、カルトン 出光美術館蔵 福島繁太郎の娘を描いた肖像画



(図2)《受難》1 受難 1935年 油彩、紙 出光美術館蔵

そして1930年頃になると、日本でもおなじみのルオーらしい作風が確立しました。本展に出品される49点の絵画のうち約3分の2が、この1930年代から40年代に描かれた華やかな作品です。

ルオーと専属契約を結ぶ前の年、ヴォラールは、アルフレッド・ジャリの戯曲『ユビュ王』に触発されて執筆した自身の著作『ユビュおやじの再生』のために、画家に挿絵制作を依頼しています。ルオーは自らの版画集『ミセレーレ』の出版を交換条件に、この仕事を引き受けました。ヴォラールは出版業者としても歴史に名を残しており、ピカソやシャガールも彼から版画制作の依頼を受けています。本展には35点の版画が出品されますが、その大半がルオー版画の双璧ともいべき、この『ミセレーレ』と『ユビュおやじの再生』から選ばれています。

『ミセレーレ』は、キリストの受難、人間の愚かさや哀しさ、戦争の悲惨さといった重いテーマを扱った58点からなる版画集です。そこには、日々の現実さえも宗教的な倫理観を通して見るという画家の姿勢が反映されています。第8図《自分の顔をつくらぬ者があるか?》(図3)では、派手な衣装と滑稽な演技の裏に哀しみを隠した道化師の姿が描かれています。その独特の表情から、みなさんはどのような印象を受けるでしょうか。ルオーは油彩やグワッシュで『ミセレーレ』のヴァリエーションを数多く残していますが、本展でも《自分の顔をつくらぬ者があるか?》の油彩版(図4)をはじめ、5点の油彩版やグワッシュがオリジナル版画とともに展示されます。このルオーらしいスタイルの『ミセレーレ』に比べ、『ユビュおやじの再生』は、ナンセンスな諷刺物語の挿絵として描かれたこともあって、より自由な表現にあふれた楽しい版画集です。彼は子供の頃ドーミエの諷刺版画が大好きだったそうですが、第6図《聖歌隊員ユビュおやじ》(図5)も、諷刺画的性格が色濃い作品です。3頭身のユビュおやじが大きなおなかを膨らますユーモラスな姿からは、「民衆芸術の方向にむいている」というこの版画集に対する画家のスタンスが読み取れます。

『ユビュおやじの再生』の大半と『ミセレーレ』では、画家が描いた原画を写真製版で銅板に転写するエリオグラヴィールの手法が

使われました。けれどもルオーは転写された試刷の平板な仕上がりに満足できず、アクアティント、エッチング、ドライポイントなどで手を加え、スクレイパーやバーニッシャーで版を削りました。銅版画に不慣れだったルオーにとって、これは試行錯誤の連続というべき困難な作業でしたが、これによって白黒の画面に繊細な線や光の表現が加わり、深みや奥行きが生まれ出されていきました。こうして生まれた対照的な2つの版画集は、絵画とは一味違った大胆で力強い表現によって、近代版画史のなかでも重要な位置を占めているのです。

[学芸員 水沼啓和]

関連イベント

■ 講演会「若き日のルオー」

講師:萩原敦子(パナソニック汐留ミュージアム学芸員)

10月27日(日)14:00より/11階講堂にて/先着150名/聴講無料

※当日12:00より11階にて整理券配布

■ コンサート「ルオーゆかりの"放蕩息子"と道化の音楽」

演奏:田中正也(ピアニスト)

11月4日(月・祝)14:00より/1階さや堂ホールにて/定員150名/

参加無料

※往復ハガキによる申込制/10月23日(水)必着

※詳しいお申込方法はチラシまたはホームページをご覧ください

■ 市民美術講座「人間観察の画家 ジョルジュ・ルオー」

11月16日(土)14:00より/11階講堂にて/先着150名/聴講無料

講師:水沼啓和(当館学芸員)

ジョルジュ・ルオー展

2013年10月1日(火)▷11月17日(日)

[休館日] 10月7日(月)、11月5日(火)

[観覧料] 一般 1000(800)円、大学生 700(560)円

※小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※()内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの65歳以上の方の料金

※前売券はローソンチケット(Lコード:33908)、セブンイレブン(セブンコード:

025-186)、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口

(11月17日まで)にて販売



(図3)『ミセレーレ』より「自分の顔をつくらぬ者があるか?」1923年 エリオグラヴィール・シュガーアクアティント・ドライポイントほか 富山県立近代美術館蔵



(図4)《自分の顔をつくらぬ者があるか?》制作年不詳 油彩、紙 清春白樺美術館蔵



(図5)『ユビュおやじの再生』より「聖歌隊員ユビュおやじ」1928年 エッチング・ルーレット 富山県立近代美術館蔵

現代美術と祈り

祈りの画家「ジョルジュ・ルオー展」開催にあわせ、7階展示室では、当館の現代美術コレクションから、「祈り」や「崇高」と関連する3作家、村上友晴、宮島達男、松尾藤代の作品を選び、「現代美術と祈り」展を開催いたします。

カトリック教徒だったルオーは、キリストの受難や聖書の風景など、宗教的テーマの絵画を数多く描きました。村上友晴も、キリストの受難をはじめ聖書に題材を求めますが、その絵にキリストの姿はありません。彼は黒い抽象絵画によって、自らの「祈り」を表現してきました。ルオーと同じくカトリック教徒の村上は、北海道のトラピスト修道院で出会った修道士の真摯さに感銘を受け、1979年、洗礼を受けました。洗礼前から、木炭粉を混ぜた黒色の油絵具を、ナイフでごく少量ずつ丹念に塗り重ねていく独特の画面絵画を描いていましたが、洗礼後、それらは宗教的意味合いを強く帯びるようになります。本展では、洗礼から程なくして描かれた村上の漆黒の絵画4点を展示します。キャンヴァスにひたすら絵具を置き続け、膨大な時間をかけて繊細な表面を持つ1枚の絵を仕上げている単調な作業は、何かを表現することよりも、「神への祈り」に近い行為なのかもしれません。それは瞑想的な黒い絵画だけでなく、《ピエタ》(図1)のように清廉なドローイングでも変わることはありません。白色の絵具で描いた長方形上に、硬質の鉛筆で無数の細い線をひたすら引きながら、少しずつ絵具を削り落としていくことで描かれるこの作品からも、画家の信仰の誠実さが感じられます。

宮島達男は、村上とは全く違うやり方で瞑想的な世界を生み出します。絵画や彫刻という伝統的な技法から完全に離れ、時計や電光表示に使われるデジタルカウンターを使って作品をつくるのです。当館所蔵の《地の天》(図2)は、既成品のLEDデジタルカウンター(図3)を展示室の床にちりばめ、きらめく星々に見立てた作品です。「地にある天でも、天が地上に降りてきた訳でもなく、地と天が一体になったイメージ」であると、作者自身は述べています。それぞれ異なるスピードで、1から9までひとつずつ数字をカウントしていくカウンター。0は表示せずに真っ暗に消えますが、しばらくすると1が点灯し、再び数を重ねていきます。ひとつの

カウンターが星の一生を表していて、一度消滅した星も、必ず新しい命として再生するのです。デジタルカウンターは、《地の天》では星に見立てられていますが、多くの宮島作品では、人間の生と死、輪廻を表現するものとして登場します。例えば《Mega Death》(1999)では、展示室全体で点滅を繰り返す膨大な数のデジタルカウンターが、あるとき一斉に光を失い、観客は暗闇に包まれてしまいます。その後、少しずつカウンターが点滅を再開したとき、多くの観客はそこに生命の再生を見て、深い感動を覚えたそうです。この作品は、核戦争などで多数の命が一举に絶たれる恐怖とともに、平和への「祈り」や生命の尊さを見るものに感じさせます。仏教思想や東洋哲学から影響を受けたと語る宮島は、生と死、そして再生という東洋的な命の営みを、このように極めて現代的な技術を用いて具現化しているのです。

松尾藤代は、村上友晴と同じく絵画という媒体を用いて、静寂で崇高な光の表現を追求してきました。一連の《Total Loss Room》は、窓から入る光のきらめきを描いた、なめらかで繊細な表面をもつ作品です。部屋の内部などの細部は完全に省略され、具象と抽象の境界にある、純粋な光の表象が追求されています。なかでも十字の窓枠を通して光が入り込む1点(図4)は、明らかに十字架を想起させ、安藤忠雄の「光の教会」に通じる現代的な聖性のかたちと言えるでしょう。

[学芸員 水沼啓和]

関連イベント

■市民美術講座「現代美術と祈り—宮島達男を中心に」
10月19日(土)14:00より/11階講堂にて/先着150名/聴講無料
講師:水沼啓和(当館学芸員)

同時開催 所蔵作品展 現代美術と祈り

[観覧料] 一般 200(160)円、大学生 150(120)円

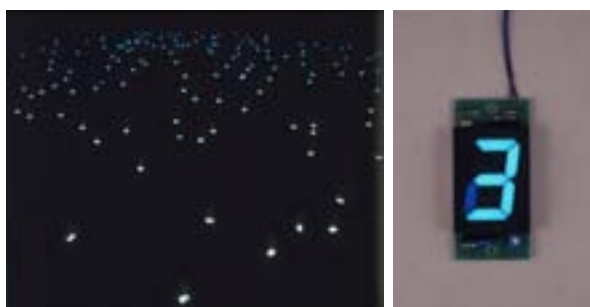
※()内は団体30名以上

※千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※「ジョルジュ・ルオー展」ご観覧の方は無料



(図1) 村上友晴《ピエタ》1992-93年
鉛筆・アクリル、紙



(図2) 宮島達男《地の天》1996年 ミクストメディア



(図3) 《地の天》に使われているものと同じLEDデジタルカウンター



(図4) 松尾藤代《Total Loss Room》1997年
油彩、キャンバス

生誕130年 川瀬巴水展

川瀬^{はすい}巴水は、大正期から戦後にかけて、日本各地の風景をあまたの美しい木版画に刻み続けた作家です。その生誕130年を記念する大回顧展が、今秋千葉市美術館で開かれます。

巴水は明治16(1883)年、東京市芝区露月町(現在の港区新橋5丁目)に生まれました。本名は文治郎。生家は糸組物をなりわいとし、仮名垣魯文を母方の伯父に持つ生粋の江戸っ子でした。幼い頃から絵を好み、14歳で青柳墨川に、19歳で荒木寛友に学びますが、家業を継ぐことが決まっていたため修業はいずれも短いものでした。ところが父の事業失敗などから25歳にして絵画への専心が許されます。鏑木清方への入門を望み、「年を取りすぎている」と一度は断られて岡田三郎助に洋画を学びますが、やがて清方の容れるところとなり、門人となって「巴水」の号を受けます。すでに27歳になっていました。

転機が訪れたのは大正7(1918)年。同門の伊東深水が手がけた連作《近江八景》を見て木版の魅力に打たれます。そして以前からの知己であった同作の版元・渡邊庄三郎と組み、塩原に取材した三部作を発表。洋画の経験を活かした、写生に基づく篤実な下絵が清新な木版画となり、好評をもって世に迎えられました。以後全国を旅しながらたゆまぬ制作を続け、日本の風景美を国内外に発信して「昭和の広重」と讃えられることになるのですが、その版業を見渡すにはまず、巴水の人生を決定したともいべき渡邊庄三郎について語らなければなりません。

渡邊庄三郎(1885-1962)は浮世絵商から出発した人です。商品である古版画の美に魅せられ、古い版木の再摺や名作の復刻を手がけるなかで、伝統的な彫り・摺りの技術にますますのめり込んだといいます。明治39(1906)年に独立して京橋に渡邊木版画店を構え、浮世絵研究を続けるうちに当時衰微しつつあった新出版版一つまり同時代の絵師を迎えて新たな作品を世に出そうとの構想がめばえます。まず声をかけたのは店で復刻版を求めたオーストリ

ア人の画家フリッツ・カペラリーや洋画家の橋口五葉といった人たち。いかにかつてない「絵」を生み出そうとしていたかがわかります。彼らとの共作に確かな手応えを感じ、本格的な連刊に乗り出したパートナーが美人画の伊東深水であり、風景画の巴水だったのです。庄三郎が創始し、何人もの追随者をだした近代の浮世絵再生の試みは、現在「新版画」(または「新板画」と呼ばれています。巴水についていえば、生涯に制作した渡邊版は550点にも及びます。庄三郎が最も数多く組んだ相方が、巴水その人でした。

庄三郎は新版画に船出した頃、白い和紙にくっきりと映える版の墨色の美しさ、肉筆にはなしえない木版画ならではの味わいについて語り、また新時代の版画には画家それぞれの個性が発揮されるべきだと主張しています。彼は巴水の日本画にふれた時「はじめから版式で、木版画に真向きであった」と感じたといいますが、それは庄三郎が理想とする版画の実現に、巴水の作風がふさわしいと直感したということでしょう。なるほど巴水の木版画は、その最初期から版にしかできない造形に満ち、なおかつ強烈な個性の光を放っています。

大正8(1919)年の《暮れゆく古川堤》を例にあげましょう。大粒の雨が今にも落ちてきそうな初夏の夕暮れ、生温い川風の吹くなか舟も人も家路を急ぎます。横長の判型に色面が帯状に流れる構成をとり、黒雲にはバレンの跡がありありと残されて、本図が肉筆の複製ではなくあくまでも版の絵であることを教えてくれます。色数をしぼり、画面のトーンをぎりぎりまで落としたところはいかにも、雲ひとつない晴天よりも曇りや雨の景、夜景を好んだ巴水らしい仕上がり。庄三郎は絵師の立会のもと、ともに納得するまで何度でも試摺を重ねたといいますが、本図が長い時間をかけて完成した時の、ふたりの満足げなため息が聞こえるようです。

最初期作の好評を受けて、旅にではスケッチを描きため、東京に戻っては版画を制作するという巴水の暮らしが定まりました。大正9(1920)年には16点からなる初の連作、その名も《旅みやげ第一集》が完成。以後も旅を重ね、版行を重ねてゆく生活が続きます。大正12(1923)年の関東大震災では家財を焼き、200冊にほんんとしていた写生帖をすべて失うという悲劇に見舞われますが、その



《暮れ行く古川堤》 大正8年 木版、紙 渡邊木版美術画舗蔵



《新大橋/東京二十景》 大正15年 木版、紙 渡邊木版美術画舗蔵

時庄三郎は、自身も店を焼かれて版画や版木の大半を無くしたにもかかわらず、「これから版画はますます盛んになる」と焼け残った版画を旅費の足しにするよう託し、巴水を旅に送りだしています。

巴水の旅は北海道から鹿児島まで全国に及びました。名所旧跡も描きましたが、多くはかつて日本のどこにでもあった風景。雄大な眺めよりは何気ない小景に心寄せる人でした。山里や漁村、静かな寺社、古都の小路、鄙びた温泉地—。なかでも河畔や海辺、埠頭など水のあるシーンを好み、それは水性顔料を用いる木版画によく合いました。巴水は四季や時刻の表情を大切にし、またしばしば土地に暮らす人を点景として織り交ぜながら、おぼろ月の、わきたつ入道雲の、そぼふる雨の、しんしん雪の降る風景を、あくことなく写生帖にとどめてゆきました。実験的な初期にくらべて震災後、とくに戦後に饒舌すぎる作があるのは否めませんが、外国人が期待する日本のイメージをなぞるような作もないとはいえませんが、巴水の描く日本は内外の版画ファンに長く支持され、今なお愛されています。旅を友とし、あまたの旅みやげを残したその版業は、病で世を去る昭和32(1957)年まで続いたのです。

渡邊庄三郎が明治の末に開いた渡邊木版画店は、「渡邊木版美術画舗」として今なお銀座8丁目に在り、版元としての活動も続いています。今回の展覧会は、同店と庄三郎の孫である渡邊章一郎氏の全面的な協力を得て開催の運びとなりました。その良質な巴水コレクションを惜しみなくご出品いただくほか、巴水の生の感興を伝える写生帖や原画類をあわせて展示し、旅先での足取りや版画制作の過程も浮き彫りにします。また同時開催する所蔵作品展「渡邊版—新版画の精華」では、当館のコレクションから庄三郎が手がけた名品の数々をご覧ください。すでに述べたカペラリーや五葉、深水のほか、山村耕花や名取春仙、チャールズ・バレット、エリザベス・キース、吉田博らが登場する予定。企画展・所蔵作品展ともに、版画好きにはこたえられない空間になるはずです。



《房州鴨川》 昭和9年
木版、紙 渡邊木版美術画舗蔵



《鯉のぼり(香川県豊浜)》 昭和23年
木版、紙 渡邊木版美術画舗蔵



《上州法師温泉》 昭和8年 木版、紙 渡邊木版美術画舗蔵

この原稿を書きながら、私は今、巴水の作品集を繰り返して出品リストや章構成を考えているのですが、実に困るのは旅心をくすぐられること。作業に集中しているつもりが心はいつしか日本全国津々浦々へー。みなさまもぜひ当館で、今やどこにもない、懐かしい日本への旅にお出かけください。ただし展示室をでる頃には、すぐにも旅にでたくなっているに違いありませんが…。

[学芸員 西山純子]

関連イベント

「なんでも鑑定団」でおなじみの渡邊章一郎氏（渡邊木版美術画舗社長）を招いた記念講演会や、川瀬巴水の長女・文子氏によるトークショー、版画の摺実演などのイベントを予定しております。詳細、申込方法などは決まり次第チラシ、ホームページにてお知らせいたします。

生誕130年 川瀬巴水展

2013年11月26日(火)▷2014年1月19日(日)

【休館日】 12月2日(月)、16日(月)、29日(日)~1月3日(金)、6日(月)

【観覧料】 一般 1000(800)円、大学生 700(560)円

※小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※()内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの65歳以上の方の料金

※前売券はミュージアムショップ、ローソンチケット、セブンイレブン、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口にて販売。(販売時期はお問い合わせください。)

展覧会予告 光琳を慕う—中村芳中展



千葉市美術館では来春、企画展「光琳を慕う—中村芳中」を開催いたします。すでに館内や一部の美術館では左の先行チラシを配布していますが、こちらでも簡単に告知させていただきます。

中村芳中（?～1819）は江戸時代後期の大阪を中心に活動しました。最初は南画風の山水や指頭画を描きますが、尾形光琳の画に傾倒し、たらし込みを駆使した作品を描くようになります。江戸へ下った芳中は享和2年（1802）に『光琳画譜』を出版します。江戸琳派の祖として近年人気の高い酒井抱一が琳派風の作品を描き始めるのとはほぼ同時期のことでした。その後芳中は大阪へ戻り、ぼつてりしたかたちのほほえましい作品を多く残しています。

先日の所蔵作品展「琳派・若沖と花鳥風月」の中でも『光琳画譜』をご紹介します。芳中を大々的に取り上げる展覧会としては約10年ぶりとなりますので、お楽しみに。

会期 ▶ 2014.4.8[火]－5.11[日]（予定）

◎ 千葉市美術館「友の会」会員募集中

展覧会が何度でも観覧でき、展覧会図録も一割引で購入できる「友の会」入会が大変お得です。

【会員の特典】

- 会員は、企画展や所蔵作品展を年間、何回でも観覧できます。
- 会員の同伴者(3名様まで)は、団体料金で観覧できます。
- ミュージアムショップで、展覧会図録やグッズを10%引で購入できます。(一部除外あり)
- 展覧会や講演会等の美術館情報をお送りします。
- 会員対象の催しもあります。

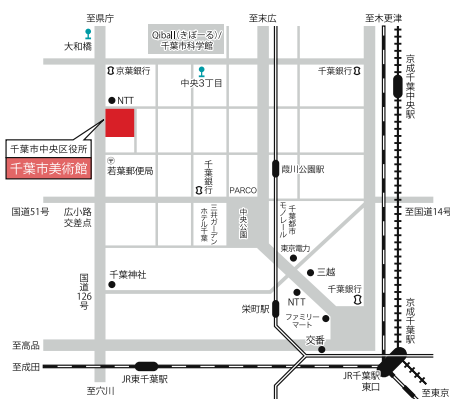
	一般会員	学生会員 (大学・専門)	ファミリー会員 (ご家族4名様まで)
入会金	1,000円	500円	2,000円
年会費	2,000円	1,000円	4,000円

入会のお申し込みは美術館受付にて。

◎ 編集後記

表紙の作品は当館が所蔵する川瀬巴水の版画です。11月26日から開催する「生誕130年 川瀬巴水展」では巴水の版画であった渡邊木版美術画舗からたくさんの作品をお借りします。見る機会の少ない写生帖や下絵など資料も出品される予定ですので、ご期待ください。また、その前に開催する「ジョルジュ・ルオー展」は、千葉では初めてのルオー展となります。常々アンケートにて西洋絵画の展示を望まれる声も多く、その中でもルオーは人気の画家です。この機会にぜひご覧ください。余談ですが、今年は川瀬巴水も高村光太郎も生誕130年、そしてルオーは巴水と1年違いで亡くなっています。同年代としては意外な3人ですが、3つの展覧会を見ることで時代性を改めて考えることが出来そうです。

[広報 磯野 愛]



【開館時間】

10:00-18:00 (毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

【交通案内】

- JR千葉駅東口より
 - 徒歩約15分
 - バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
 - 千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
 - 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
 - 東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
 - 地下に駐車場があります

【編集・発行】

千葉市美術館
〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
<http://www.cma-net.jp/>
【発行日】2013年10月24日
【印刷】株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

